

作品制作する美大院生が  
**研究計画書を書くために - 2 (改訂)**  
～ 仮説生成型の台頭の思想的背景 ～

女子美術大学大学院美術研究科  
非常勤講師: 石井拓洋

2018-5-23  
大学院講義 前期第6回

このスライド中の記号は、それぞれ下を表わします。

- ・「 」 引用文
- ・〈 〉 術語、一般名 ( common name ) 、私による語句の強調
- ・『 』 書名、雑誌名、作品題名。引用文内の引用文。
- ・[ ] 出典
- ・※ 私の解釈・考えを多く含む記述

## 4-1-1 用語の整理 1 ( 研究的視点を基礎付ける哲学用語 )

- 〈認識論〉 epistemology

- 人は外界をどのように認識できるのかを問題とする議論

〈実在論〉 realism (ここでは近代以降の意味)

認識論上の立場の一つ。事物は主観とは独立にそれ自体で定まった在り方をしており、人は事物を客観的に直接認識可能とする。

〈素朴実在論〉など。ここでの対概念は〈観念論〉。

〈観念論〉 idealism

認識論上の立場の一つ。事物は主観の在り方に応じて存在しており、人は事物を言語などによる表象によって間接的に認識するとの

## 4-1-2 用語の整理 1 ( 研究的視点を基礎付ける哲学用語 )

- 〈存在論〉 ontology

- この世を成り立たせている根本的な存在を問う議論

〈実体論〉 substantialism

〈存在論〉を前提として現れる各立場の総称。〈唯物論〉や〈唯心論〉など。〈実体〉とは、自律的に存在し、他の事柄の在り方に依存することはないもの。

〈関係論〉 relationalism

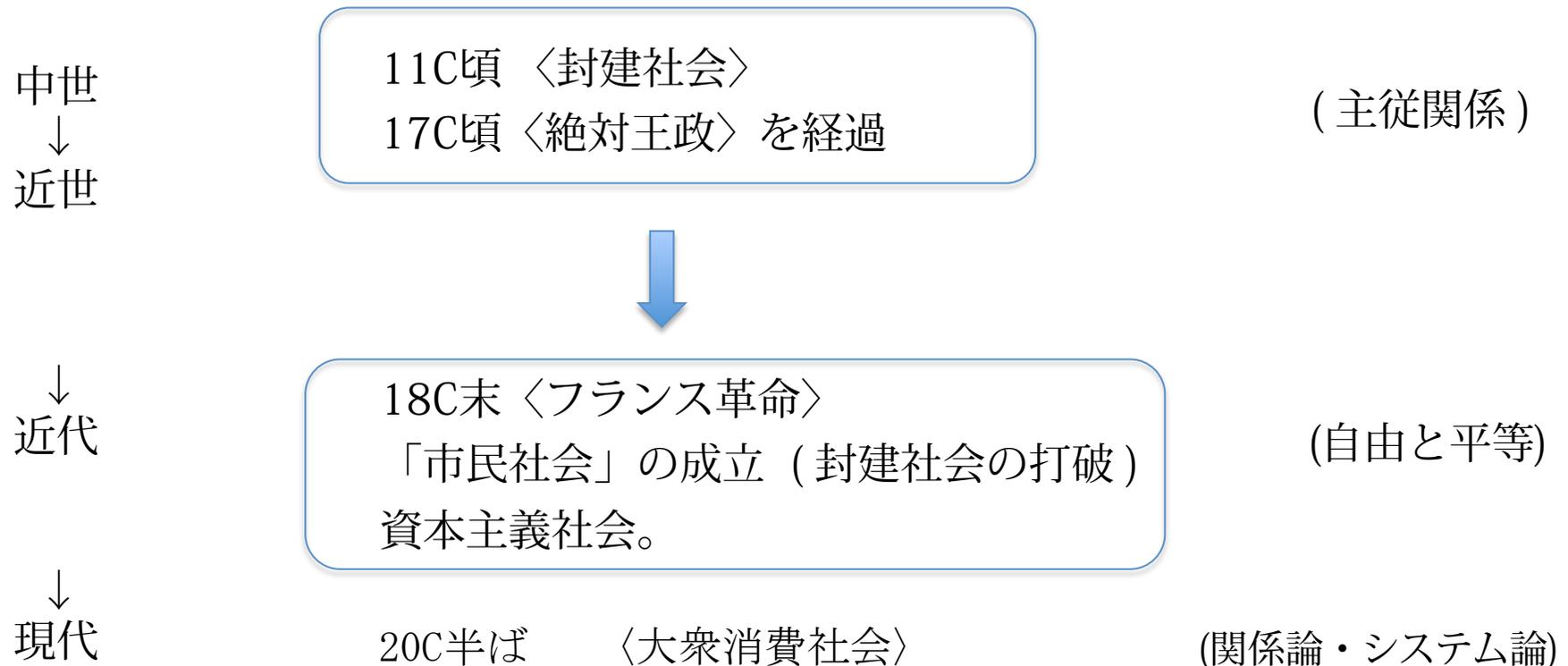
「関係こそが第一次的な存在」とする立場。「実体論から関係論へ」とする20世紀以降の思潮において、現代哲学での有力な立場。



## 5-1 量的研究 (仮説検証型) の思想的背景としての 〈西欧近代主義〉

きんだい 【近代】 modern age (歴史時代区分として)

歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、  
一般には封建制社会のあとをうけた資本主義社会についていう (広辞苑 p.733)。



# 〈近代主義〉

( modernism )

( 思想としての )

社会的・文化的構造を 宗教的権威や道徳的規範に立脚しながら構築しようとする **伝統主義と絶縁し、〈世界の合理化〉という普遍原理 (※ 科学) に基づいて社会や文化の建設を推進しようとする精神的態度のこと。**

したがって、、、

**秩序よりも進歩が、宗教よりも科学が、個別主義 (※具体) よりも普遍主義 (※抽象) が、属性原理 (※ 身分など) よりも 業績主義 (※ 実力) が尊重され鼓吹される。**

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、**この種の エートス ( ※ 持続的 特徴) であった、、、。**

〔 平凡社 『世界大百科事典 7』 高橋徹 pp.630-631 〕

# 近代主義 modernism とは

## 近代主義

- ・ 秩序よりも進歩
- ・ 宗教よりも科学
- ・ 個別主義 (※具体)よりも普遍主義 (※抽象)
- ・ 属性原理 (※身分など)よりも業績主義 (※実力)が尊重

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、この種のエートス。

「この種のエートス」  
(持続的な特徴)

=

啓蒙主義 的特徴  
(蒙きを啓らむ, くらきをあきらむ)

# 〈啓蒙思想〉

Enlightenment

- 17Cから18Cの 西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 人間のもつ合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 〈キリスト教・王侯貴族〉のためから、〈**市民**〉の**ための生活**へ
- 啓蒙思想が 〈近代〉 を 導いた

# ルネ・デカルト (1589 – 1650)      Rene Descartes

それまでの中世のスコラ学 = 神学を批判して、合理的探究 (科学) の基盤をつくった



画像 : <http://www.ghc.usp.br/server/Sites-HF/Fabio-Ardito/>

- 「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点)
- 神の合理的な存在証明 (証明の目的 = 人間の認識能力の正確さを担保するため)
- 精神と物質の「物心二元論」へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

## 啓蒙思想のルーツ

「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点、『方法序説』1637)

“Cogito, ergo sum” (コーギト・エルゴ・スム)

Q. 一体、この世で確実に存在すると言えるものは有るのか？

A. 全ての存在を疑いつくしている、この〈疑っている私〉の存在を、私は疑えない。

(〈私の存在〉を疑うとしても、〈疑っている意識〉が確かにある。無からは何も生じない。だから疑う意識が生まれるのは「私」が存在する証拠だ)

「自分が真理を語っていることを私に保証しているところの

『私は考える、それ故に私は有る』という命題のうちには、

考えるためには存在しなければならぬことを私はきわめて明白にみる、

ということ以外には何ものも無いことをみとめた」

(デカルト「第4部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.46)

つまり、まずは「主観」が確かに存在する。

# 神の合理的な存在証明

- ・ 確実なる存在の「私」の中には「神の観念」もまた存在する。  
↓
- ・ そもそも「無からは何物も生じない」。つまり〈不完全〉からは〈完全〉は生まれない。  
↓
- ・ ところで、神は〈完全〉だ。  
↓
- ・ 一方、私は〈不完全〉なので、〈完全〉なるものであるはずの「神の観念」は創れない。  
↓
- ・ つまり、「神の観念」とは、私達が創ったものではなく、「神」から与えられたものである。
- ・ したがって、私達が「神の観念」を持っているのならば「神」は存在せねばならない。

(参考： 今道友信『西洋哲学』講談社、1987年、pp.223-224)

「神の存在証明」を通して、「主観」と「客観」の存在の確信へ

精神と物質の「物心二元論」へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

不完全なる人間からは完全なる神をつくれない。なので神は存在する。

「われわれを作ったのは神である。とすると、人間のもつ認識能力は『歪んだ能力』

ではありえない。なぜなら神は完全な存在でありしたがって欺瞞者ではないからだ。

だからわれわれは、明瞭判明に認識されるものをそのまま「客観的实在」と

信じていい。こうデカルトは言うのだ」

(竹田青嗣『自分を知るための哲学入門』ちくまライブラリー47、1990年、p.138)

つまり〈主観〉と〈客観〉なるものはそれぞれ存在する。

→ 〈認識論〉における〈实在論〉へ

# 物心二元論と近代主義の要素

## 精神と物質の「物心二元論」へ

(精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

「主観」

内界

「客観」

外界

精神 ←→ 物質 (延長)

精神 ←→ 身体

人間 ←→ 自然

さらに

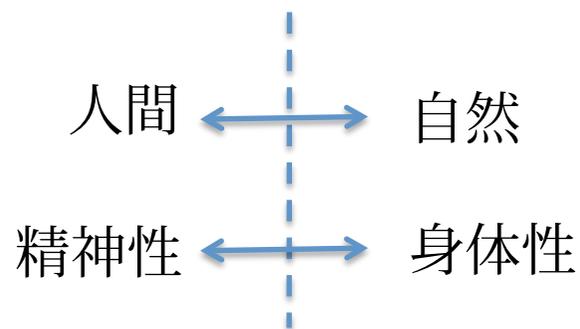
生 ←→ 死

優 ←→ 劣

# 物心二元論と近代主義の要素

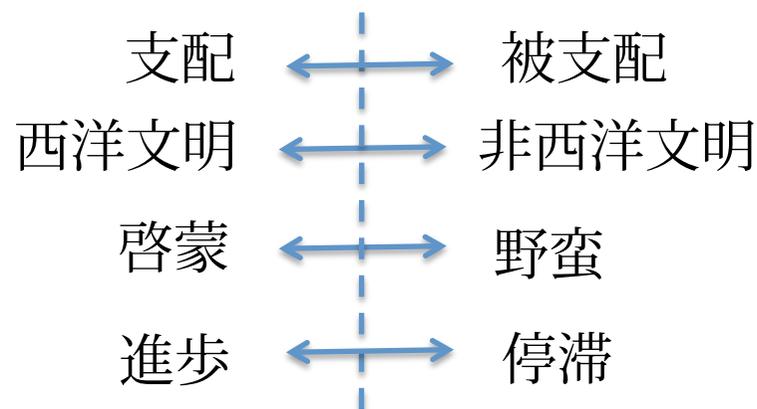
分断的な「物心二元論」から「二項対立」的な近代的世界観の形成

「優」



「劣」

果ては、、、



## 啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

- **西欧中心主義** eurocentrism  
西欧こそが世界で最も進んだ文明であるという考え。
- **要素還元主義** reductionism  
物事の真理や本質をさぐるには、余計な要素を極力排除して、単純にすべしとする考え。〈オッカムの剃刀〉。
- **進歩主義** progressivism  
新しいことならば、より真理や本質に近づいているとする考え。
- **人間中心主義** anthropocentrism / humanism  
たとえば、人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え。
- **機械論** mechanism  
人間は科学によって自然を制御することができるとする。
- **実在論** realism (⇔ 観念論)  
人間の能力は、主観の外側にある外界を、ありのままに認識することができるとする。客観主義の前提となる考え。
- **実体論** substantialism (⇔ 関係論)  
この世を成り立たせている根本的な存在にして、他に依存せず自律的な真理や本質の存在を信じる。

## 5-2 量的研究 (仮説検証型) は、 〈西欧近代主義〉を前提として可能となる

- 〈実体論〉を前提として、〈真理〉や〈本質〉の探究が可能となる。
  - この世を根本的に成り立たせている〈実体〉が存在するという確信が得られる
  - 〈実体〉は、自律的なので、要素還元主義的に探究可能
  - なので〈実体〉の存在は、文脈を考慮せずに実験・検証が可能 (量的データへ)
- 〈実在論〉を前提として、〈客観〉の追求が可能となる
  - 人間は客観的な認識が可能
  - 〈主観〉を、より排するための共通言語としての〈量的データ〉(数値データ)の使用
  - 〈主観〉を排するための手法としての数学(統計学)の利用
- 量的データと統計学的処理で、〈仮説〉が事前に立てやすくなる
  - 統計学の使用を可能とするための仮説の形式が定まる(因果関係を想定する立論)
  - 仮説の形式が定まるので、仮説が立てやすい。問いも立てやすい。

## 5-2 量的研究 (仮説検証型) は、 〈西欧近代主義〉を前提として可能となる

しかし、もし、〈西欧近代主義〉への信頼が揺らぐなら、  
量的研究 (仮説検証型) の信頼も揺らぐ。

- そもそも〈実体〉・〈本質〉・〈真理〉の存在への懐疑
- 〈客観主義〉への懐疑
- 〈関係論〉的モデル、〈観念論〉的 (記号論的) 視座

## 6-1 〈西欧近代主義〉への懐疑の端緒

# 人間は世界を正しく認識できるのか？

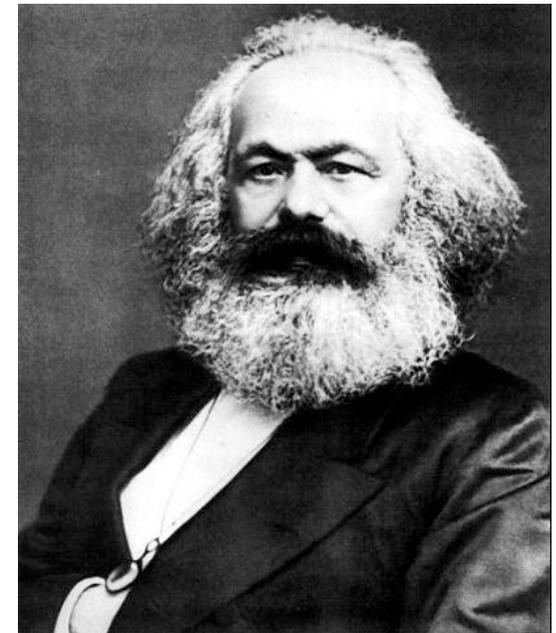
西欧近代主義  
の綻び

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

人間は『どの階級に属するか』によって、  
『ものの見え方』が変わる。

- 人間の認識は確実ではない。  
状況や他との関係性によって変化する。  
人の置かれた環境的文脈の重視。

- ※ 「関係論」へのルーツの一つ
- ※ 〈マルクス主義批評〉 → 英米の批評理論の今日の主流
- ※ 社会学的視座



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karl\\_Marx.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karl_Marx.jpg)

# 人間は世界を正しく認識できるのか？

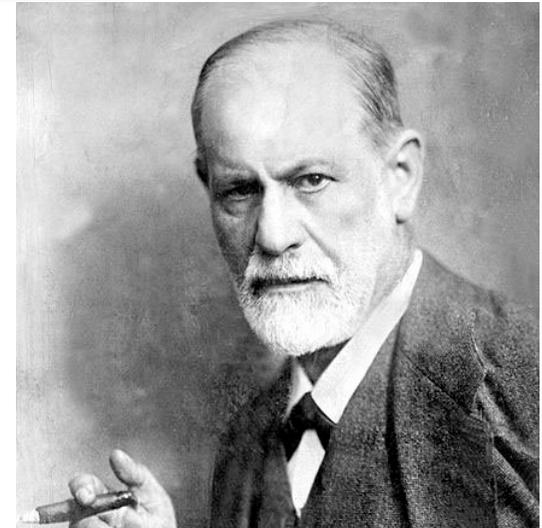
西欧近代主義  
の綻び

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)

人間が**直接知ることのできない無意識の領域**が存在する。そしてそれが人間の考えや行動を**支配**する。

→ **人間は人間自身のことも  
知ることができない**

※ 〈实在論〉、〈実体論〉への懐疑



# 人間は世界を正しく認識できるのか？

西欧近代主義  
の綻び

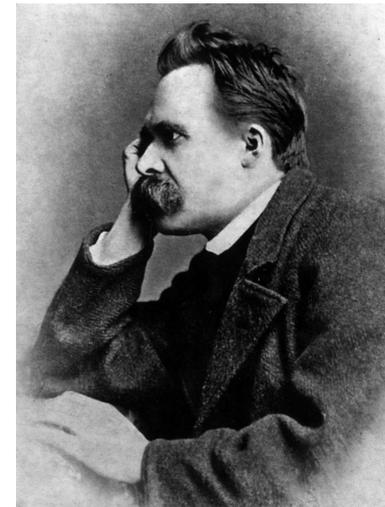
- ・ フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900, 独)

人において〈完全な認識〉はなく、〈客観世界〉もない。  
まして、外界自体が向上していくような〈歴史〉的目的性はない。  
外界はカオスであり、人は、各自の利益に基づき、  
各自にとって 都合良く、このカオスを解釈しているだけだ。

→ 各自の利益 = 〈権力への意志〉

参照: ニーチェ 『権力への意志』 (妹により死後刊行)

※ 〈歴史〉的目的性 = ヘーゲル的世界観



# 人間は世界を正しく認識できるのか？

西欧近代主義  
の綻び

- ・ エドムント・フッサール Edmund Husserl (1859-1938, 奥)

「正しさ」は、それ自体として、客観的に存在するのではなく、  
多くの主観の間での(多くの人との間での)相互理解によって導かれる。  
つまり、「正しさ」の定立は、主観と客観の一致への試みではなく、  
主観の間で、知覚の妥当をつくる営みである。「客観」というものはない。

参照: 竹田青嗣 「6.現象学の発見」『自分を知るための哲学入門』(ちくまライブラリー) p.59

→ 〈現象学〉 Phenomenology

→ Q. なぜ、主観の間で、相互理解が可能なのか？

A. 人は 外界を 同じ 〈言語(構造)によって表現〉 しているから。  
その言語構造自体を、もとより 人は「了解」で体得しているから。

→ 「質的研究は、その基礎付けを、特に現象学に頼っている」

末武康弘ら『質的研究入門:「主観性を科学化する」』 p.24



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edmund\\_Husserl\\_1900.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Edmund_Husserl_1900.jpg)

# 人間は世界を正しく認識できるのか？

西欧近代主義の  
綻び

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)

人間の観念は自由ではなくて、**言語規則の範囲で制限** されている。

ex.) 虹の色

日本 (赤、**橙**、黄、緑、青、**藍**、紫) 7色

ドイツ (赤、黄、緑、青、紫) 5色

→ 自国語の**単語の有無**で世界認識が左右されてしまう。  
つまり、それほど、人間の認識とは**自由ではなく**、  
また、物事を**正確に語る**ことができない。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ferdinand\\_de\\_Saussure\\_by\\_Jullien.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ferdinand_de_Saussure_by_Jullien.png)

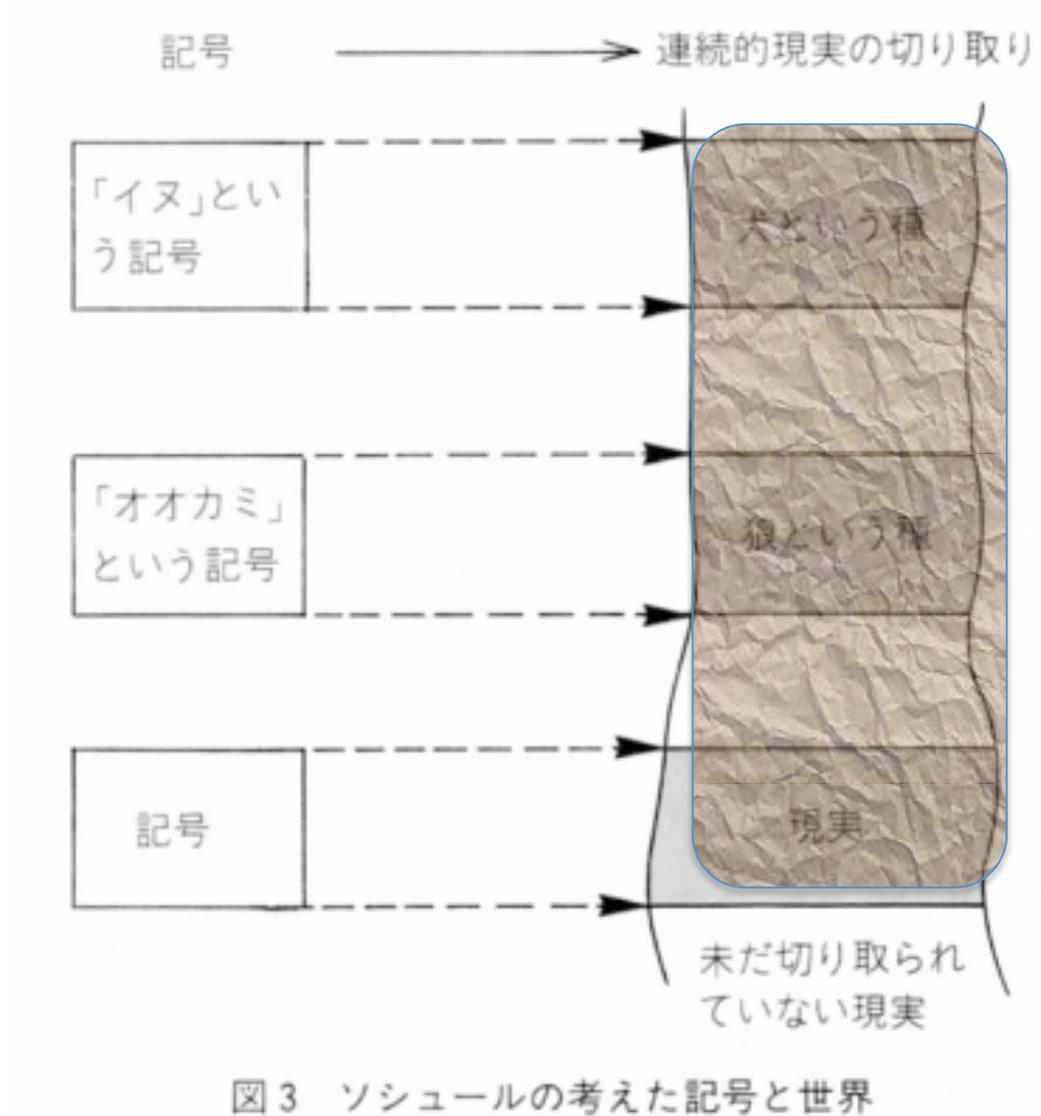
※ 〈实在論〉、〈実体論〉への懐疑。

※ 〈観念論〉、〈関係論〉への移行。 → **〈記号論〉**・〈構造主義〉へ。

## 6-2 〈西欧近代主義〉への懐疑 ソシュール 〈言語論的転回〉と〈記号論〉

# 言葉が世界認識をつくる

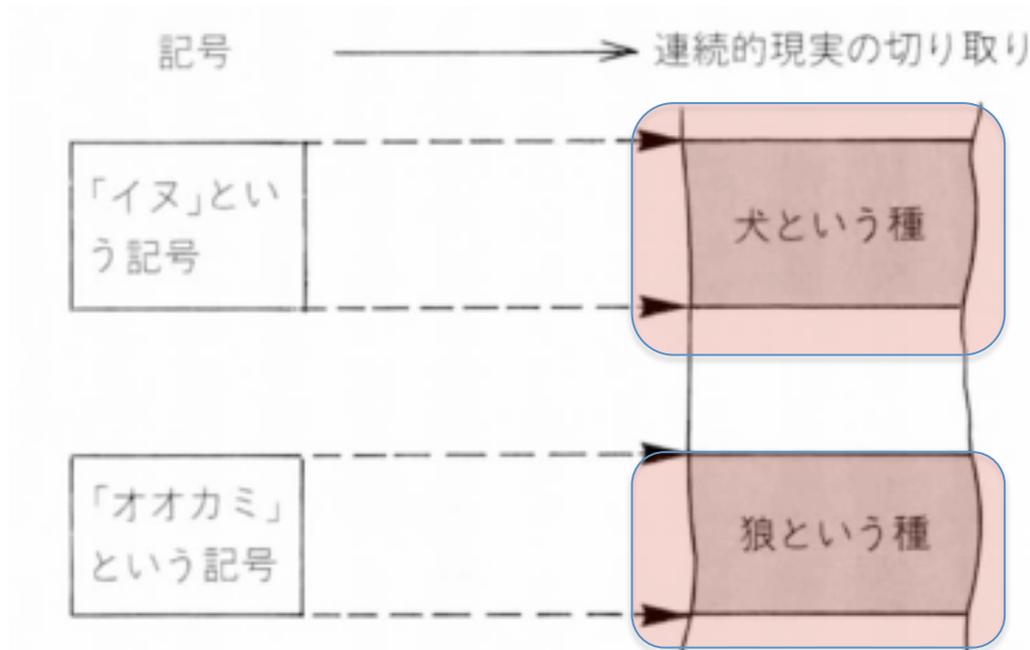
(ソシュール)



〈イヌ〉的な生物種の  
連続したつながり

本来、自然には  
このような連続した  
種をつながりしか  
存在しないはず

# (ソシユール)



連続した連なりの一部を

「犬」などの **記号を用いて  
区分**することで、

「犬」の認識がうまれる。

その人が使用する言語の仕組みや  
在り方に応じて、その人の外界は  
区分される = 「分節」

# 「言語名称目録観」

ソシユール以前の外界認識モデル

最初に実体が存在する。  
人は実体にラベルをつける。  
それによって外界を認識する

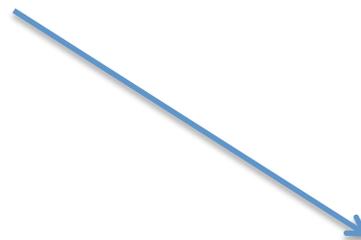
外界 = 実体としての外界

記号化 = 言語化 = ラベルづけ

ラベルによる  
外界認識



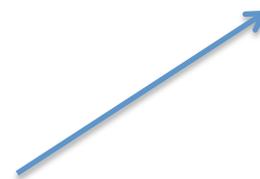
犬



山犬



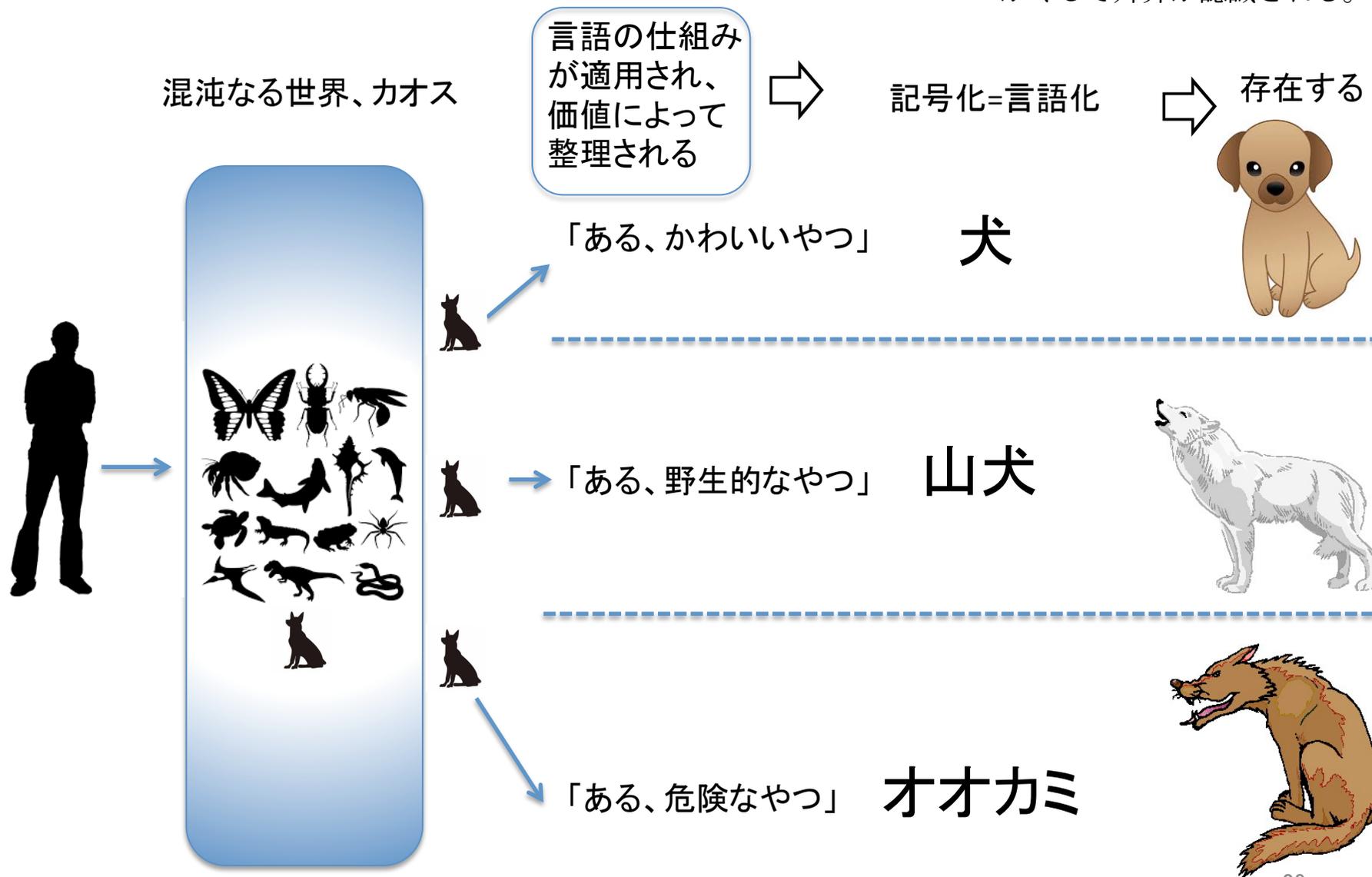
オオカミ



# 「言語論的転回」以後

ソシュール以後の外界認識モデル，記号論の視点

使用言語の仕組みに基づいて  
価値観が生まれる。そして、  
本来は〈区分別のない〉外界を  
言語を用いて〈区分別する〉。  
かくして外界が認識される。



言語「犬」

と

これ



とのつながりは？

表現記号  
シニフィアン

表現内容  
シニフィエ

言語 「犬」  
イヌ

と

これ



とのつながりは ?

まったく必然性はない (恣意的である)。  
なぜなら、地域ごとに様々な〈つながり〉方が存在するから。

表現記号	dog (英)	chien (仏)	hund (独)	cane (伊)	собака (露)
	ドッグ	シアン	フント	カーネ	サバーカ
表現内容					

表現記号 (シニフィアン) と 表現内容 (シニフィエ) とのつながりは「恣意的」である。

そしてまた、

ほかならぬ 「いぬ」 という言葉の「音」を示すためには？

ほかならぬ  という「概念」を 示すためには？

## 音の差異

## 概念の差異

「いす」×

「いと」×

「きぬ」×

「いぬ」

「いに」×

「しぬ」×



これではなく



これ

「シニフィエ」  
記号内容



これでもなく

「シニフィアン」  
記号表現

言葉においては  
「音」も「概念」も 他との関係による「差異」によってしか示すことができない

「言語とは差異の体系である」 = 言語は実体ではない。関係の産物。

## 6-3 質的研究 (仮説生成型) は、 〈西欧近代主義〉批判から、新たな「研究上の問い」がうまれる

- 〈実体論〉への懐疑により、原因よりも、文脈や意味への問いへ
  - この世を根本的に成り立たせているような、原因としての〈実体〉はない。
  - もとより存在しない「根本的な原因 (因果関係)」を問うことへの不信
- 〈実在論〉への懐疑により、主観／客観の無効。主観への着目。
  - 人は言語を介して常に主観的に世の中を解釈している。客観なるものの背理の自覚。
  - 人が、ある事象を、言語によって解釈していった、そのプロセスの解明への移行。
  - 「意味」や「意義」は、「言語」によってしめされる。
- 質的データ = 文字の〈精読〉による分析 → 生成させる仮説へ
  - 〈実在論〉、〈要素還元主義〉などの懐疑により、人の認識や統計処理への信頼の低下
  - 文字資料を分析しつつ、自らも思考を文字化しながら探究。〈現象学的還元〉。

## 6-4 留意点

- しかし、企業での研究や、競争的研究資金の申請の場では、やはり、今日なお〈量的研究〉=〈仮説検証型〉が主流。
  - 経済性を前提とする場では、〈量的研究〉の信頼性は高い。
  - マジョリティー (多数派) の視点のみに傾く恐れあり。
- だからこそ、大学で〈質的研究〉を学び、実施する意義がある
  - 大学でこそ学べる分野。
  - 経済性の追求の外側からの視点 (マイノリティーの視点) の設定が可能。
  - 近代批判という、20世紀来の知の営みを尊重した探究の実施。